
シンポジウム 6

尿路性器感染症 ; Next 10 Years ～泌尿器科感染症の原因菌と、適切な抗菌薬を検討する～

司 会 濱 砂 良 一 (新小倉病院)
和 田 耕一郎 (島 根 大)
演 者 定 平 卓 也 (岡 山 大)
小 林 加 直 (中国労災病院)
松 本 正 広 (北九州総合病院)
濱 砂 良 一 (新小倉病院)

司会のことば

令和 4 年 11 月 3 日から 5 日まで, 「Urology ; Past and Next 10 Years」と題した第 74 回西日本泌尿器科学会総会が, 産業医科大学の藤本直浩教授を会長として北九州市で開催された。本シンポジウムは世界中で進行している細菌の薬剤耐性 (AMR) に焦点を当て, 泌尿器科医が常に遭遇する尿路性器感染症について, 治療について一定の方向性を示すとともに, 過去を踏まえた Next 10 Years を考えることが目的であった。原因微生物, 薬剤感受性と薬物動態を考慮した抗菌薬の選択などに関する内容を中心に, 以下に示す 4 名のシンポジストの先生方とテーマでご講演を頂いた。

1. 急性単純性膀胱炎と反復性膀胱炎における適切な対応
岡山大学病院 泌尿器科 定平卓也先生
2. 薬剤耐性菌を考慮した複雑性尿路感染症の治療戦略
労働省健康安全機構中国労災病院 泌尿器科 小林加直先生
3. 急性細菌性前立腺炎, 急性精巣上体炎
北九州総合病院 泌尿器科 松本正広先生
4. 性感染症の原因微生物と治療
国家公務員共済組合連合会新小倉病院 泌尿器科 濱砂良一先生

まず, 定平卓也先生が急性単純性膀胱炎の分離菌と薬剤耐性の状況を詳述された。概要は, 急性単純性膀胱炎においては大腸菌の分離頻度が圧倒的に高く, 従来は複雑性尿路感染症よりも耐性株の分離が少ないとされてきた単純性膀胱炎においても, キノロン耐性大腸菌および器質特異性拡張型 β ラクタマーゼ (ESBL) 産生大腸菌の分離頻度が増加しつつあることを示された。続いて, 岡山大学で実施されてきた乳酸菌膣坐剤の反復性膀胱炎の予防効果に関するデータを示された。乳酸菌膣坐剤を隔日に 1 年間膣内に挿入することで, 膀胱炎に罹患する回数が減少し, さらに投与終了後も効果が持続することであった。さらに, 次世代シーケンサーを用いた膣内細菌叢に関する考察も示され, 同膣坐剤によって, 治療から予防の時代になっていく可能性についての展望を述べられた。

続いて小林加直先生が複雑性尿路感染症の病態や分離菌, 薬剤感受性の低下している現状について詳述された。過去に実施した三学会合同サーベイランスのデータを示し, 耐性化が進行していること, それらのデータに基づく日本感染症学会/日本化学療法学会感染症治療ガイド 2022 に向けての改訂状況や内容について概説された。特に, 現状で複雑性膀胱炎の治療期間が 7 ～ 14 日となっている点は, 改訂によって短縮される可能性について触れ, 病態, 分離菌と薬剤感受性, 治療効果によって投与期間を調整する必要性を述べられた。

松本正広先生は産業医科大学のデータを示しながら,

急性細菌性前立腺炎と急性精巣上体炎の分離菌と薬剤感受性について詳述された。いずれもグラム陰性菌の分離頻度が高く、薬剤耐性についても進行しつつある傾向が示された。また、日本感染症学会／日本化学療法学会感染症治療ガイド2019を引用して治療のストラテジーを紹介し、自施設の取り組みについても触れられた。

最後に、濱砂良一先生が性感染症に関する最近の知見と展望についてのご発表をされた。特に、以前からAMRが進行していることが問題となっている*Mycoplasma genitalium* (*M. genitalium*) 感染症と、本邦で患者数が急増している梅毒を中心に詳述された。*M. genitalium* 感染症に関しては、令和4年6月から拡散増幅検査が保険適用となったことを紹介し、非淋菌性尿道炎患者における同検査の必要性、海外のガイドラインや報告を踏まえた抗菌薬の投与法について、シーケンスセラピーの必要性も交えて解説された。梅毒については、病原微生物である *Treponema pallidum* のマクロライド系抗菌薬に対するAMRが紹介され、診断法、本邦で使

用が可能となったベンジルペニシリンベンザチンの持続型筋注製剤、治癒判定などについて新しい知見を盛り込んだ解説がなされた。

4講演が終了後、全演者に登壇して頂いて総合討論を行った。総合討論では感染症の治療だけではなく、予防にまで踏み込んだ議論がなされた。特に反復性尿路感染症、複雑性尿路感染症、性感染症については、行動療法や尿路カテーテル操作、排尿管理、性感染症のパートナーの治療など、今後とも必要になることが予想される議論が行われた。会場からの質疑は残念ながら多くはなかったが、本シンポジウムが目的としていた次回、将来につながる方向性を示すことができたと考えられた。

総会は現地開催で実施され、学術的に、そして旧知の同門や他大学の先生方との交流の場としても本当に有意義な会となった。コロナ禍の中、準備から成功裏に閉会まで指揮をお執りになった藤本直浩会長に、この場をお借りしてお祝いを申し上げて司会のことばとしたい。